
主旨文

竹内整一

東京大学教授

「死生学」プロジェクトが、あらたにグローバルCOE「死生学の展開と組織化」へと継続・発展することになり、そこであらためて東洋・アジア諸地域との研究交流を深めていくことが求められてきています。

われわれのプロジェクトにおいて「死生学」Death and Life Studiesは、これまで西洋の思想や文化のなかで進められてきたDeath Studies / Thanatologyとよばれてきたものを、より広く多様な視点で、とくに非西洋的なさまざまな思想や文化とつき合わせながら、新しい地平へと切り開こうと目指してきたものです。

そのような課題をさらに推し進めるためにも、このたび本プロジェクトが第二期に入るにあたり、これまで必ずしも十分ではなかったアジア・イスラーム文化圏との研究交流を本格的に展開していくことが求められています。

今年度から来年度にかけては、その手始めとして、最近とみに「死生学」(「死亡学」)的関心の高まりつつある中国・韓国といった東アジアの国々との研究交流を行います。儒教・仏教・道教、その他の東アジアの

文化・伝統を形成してきた諸要素は、同時に日本の文化・伝統を形成してきたものでもありますが、そこには、同じ概念・発想を共有しながらも、そうであるがゆえに逆に浮かび上がった、大きな異質性も指摘されています。

そうした点もふくめて、とりわけ「死生」をめぐる思想的・文化的知がいかに形成されてきたのか、また、今それが現在の・臨床的な実践知としていかに活用されているのか、あらためてわれわれ自身の、また相互の問題として、ともに考えてみる必要があるように思います。

「東アジアの死生学へ」というテーマは、もとより「西洋の死生学」ではなく「東アジアの死生学」を選ぶといった、安易な二者択一を意味するものではありません。これまであまり主題的には問われてこなかった「東アジアの死生学へ」と、それ自体を考察対象とすることにおいて、そこにあるであろうさまざまな可能性や問題性を見すえ、そこから、よりゆたかな「死生学の展開と組織化」への発信を試みようとするものです。